

いはくさん

第51巻 第3号



「山—川—海そして雪 水の旅とともにある石の旅」

白山手取川ユネスコ世界ジオパークでは、白山を源流に日本海へ注ぐ、手取川の流れを「水の旅」「石の旅」というキーワードで捉えています。今回の表紙の写真は、「水の旅とともにある石の旅」について白山を起点に取り上げて構成してみました。

白山とその周辺地域には、古代大陸の衝突でできた岩石、恐竜やシダを始めとする動植物の化石などの地層、また、日本海形成時だけでなく、加賀室火山以降の白山火山噴出物など、3億年前から現代までに至る大地の変動の記録が残されています。白山火山の噴火に伴い、溶岩や火山弾などが噴出、冷え固まった火山噴出物が創り出した地形や地層は、現在、黒ボコ岩など登山ルートのポイントにもなっています。白山に降る雪や雨で長い年月を経て脆くなった上流の岩は砕かれ、手取川の水とともに運ばれ、さらに水は中流域の大地を削ります。岩は水の流れにより峡谷でおう穴などつくります。小さくなった石は、丸みを帯び、多種多様な姿となり、河原で一休み。やがて、繰り返される風化と運搬により海に運ばれ、石の旅はようやく終焉を迎えます。

(川島 敦仁)

目次

P1	白山に感謝	福田 太睦
P5	ブナオ山観察舎の中で見つかるムシたち — 建物中のムシ —	中田 勝之
P9	石川県内で見られる「シカ」2023	有本 紀子
P13	続 花らんまん 夏の白山 — 登山者「花」アンケートin市ノ瀬 最終報告 —	後藤 理子

白山に感謝

福田 太睦（白山自然ガイドボランティア）

1. 思い出あれこれ

私が生まれ育ったのは金沢市役所の裏通り、向かいの家は山田さん。山田さんは夏の間は白山登山口市ノ瀬で旅館を営んでいました。昭和23年夏、山田さんに誘われて白山に登ったのが白山との最初の出会いです。お陰様で近年は年3回登拝、今ではもう200回以上登拝しています。7月1日の夏山開山祭には50年以上登っています。初めて登った頃は、市ノ瀬の六万橋を渡ってすぐ右からの登山道（写真1）に鳥居があり、行く先々に、植物見本林など多くの標識がありました。途中、お米持参でオチラシ粉（はったい粉ともいう。大麦や裸麦を焙煎し、石うす^{わらじ}で挽いた粉のこと）でお腹を満たしました。当時はまだ国立公園でなく、山頂は草鞋^{わらじ}の山でした。金沢泉丘高校の生物部だった私は、山田屋旅館を拠点に市ノ瀬手前の三ツ谷周辺から山頂まで蝶類や昆虫の調査を行い、当時県内で見つかっていなかったキベリタテハ等を確認。また、県下生物研究発表会で「白山山麓における蝶相と甲虫分布及び夜間採取について」の題で発表、金沢大学学長賞を頂きました。



昭和25年頃の旧道（写真1）



白峰西山にてブナ植林（写真2）

昭和の時代は会社の商標が「ハクサンプリント」であったため、奉獻として地元の清酒萬歳楽2本から4本を背に登拝しました。平成になってからは、サントリーの佐治様とのお縁もあり、サントリーモルツ1カートンを背に20年以上登拝しました。

平成10年には、若き時代に白山室堂で夏の間一緒に働いた学生アルバイトの仲間で発足した「白山室堂会」により、西山（白山市白峰）の広さ1000坪の山に小指大のブナ苗100本を植えました。以来下草刈り、施肥、枝打ち等の手入れを行い、20年後の今日では幹の直径は20cm以上、高さは7～8m程に育ちました。会は40周年を迎え、白山が見える場所に「われらが青春の慕標」と銘打った標柱を建てました。

近年では、氷河期時代からの生き残りであるアリ「タカネクロヤマアリ」が日本アルプスや立山で発見されたことで、白山にもいるかも知れないとけしかけられ、ほんとかな？と思いつつ、白山国立公園の特別保護地区で各種許可申請等の手続きを行なった上で、平成24年5月から9月にかけて調査を行い、何

度も捕獲し、鑑定のため東京に送るも残念ながら目標のアリは見つかりませんでした。

さて、昭和9年7月の大洪水により白山温泉の総湯や山田屋旅館等は全て流された後、高台に再建された山田屋旅館が昭和30年代迄あったのですが、知る人は少なくなる中、旅館7代目当主の山田幸夫さんに同行してもらい、専門家も交え跡地調査を行ないました。調査内容については、石川県白山自然保護センターの普及誌「はくさん」平成27年2月発行Vol.42-3号に書きました。

2. 白山登山に向けて

金沢から白山へは、今では車で行く人がほとんどですが、私が若かりし頃は電車とバスを乗り継いで行くのが普通でした。



ありし日の金名線（写真3）

<白山登山は電車とバスを乗り継いで>

金沢からは、まず野町から加賀一の宮まで「石川線」、加賀一の宮から白山下までを「金名線」（写真3）で行き、そこからバスでようやく市ノ瀬に到着します。その日は泊まります。「金名線」は名前の通り金沢から名古屋まで延伸する構想のもとで名づけられたものです。残念ながら実現しませんでした。今、跡地は「手取キャニオンロード」として活用されています。



昭和7年8月頃の白山温泉（写真4）

<白山温泉に泊まり>

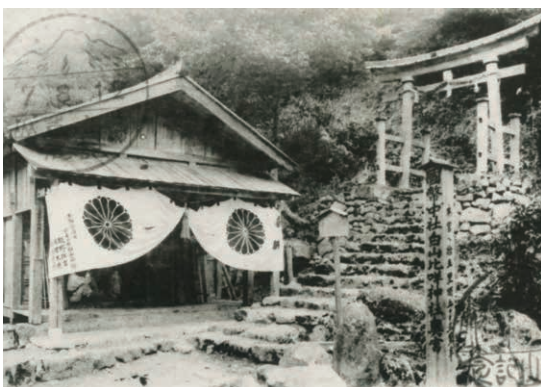
江戸時代の頃から、市ノ瀬の少し上流、湯の谷の入口に、「白山温泉」（写真4）がありました。夏には田舎芸者も居たくらいに繁盛したと、山田屋旅館の7代目当主山田幸夫さんの語り草でした。登山者は白山温泉に一泊し、翌早朝に登山を始めたそうです。白山温泉は昭和9年7月の大洪水により壊滅的な被害を受け、現在は当時の面影もなく、跡地に碑があるだけとなっています。



昭和25年8月頃 市ノ瀬（写真5）

<登山者の装備品は>

写真5は昭和25年8月頃に撮影された市ノ瀬登山口の永井旅館前の登山者たちです。終戦後から5年しか経たない貧しい中、杖に焼き印を押して、ヒノキの皮で編んだ編み笠（通称：ヒン傘）を頭に元気に登っていました。ヒン傘は風通しが良く、夏は涼しいうえ、少々の雨なら雨具も不要です。リュック、風呂敷、カバン等装備もバラバラですが、米だけは必ず持参、ほとんどが地下足袋を履いて登りました。



昭和7年8月頃 白山温泉よりの登山口（写真6）

<白山温泉から登山開始>

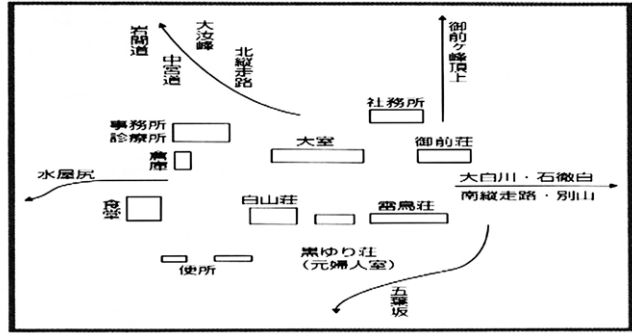
写真6には昭和7年8月12日の押印があります。登山者は安全祈願をして鳥居を通り、直ぐ上の六万山に登り旧道（越前禅定道 現：白山禅定道）を経て、現在の観光新道を登りました。現在は、昭和9年7月に発生した大洪水のため水没し、鳥居も社も流されてなくなってしまいました。また、白峰から市ノ瀬へ向かう途中にある百万貫岩は、大洪水により宮谷から本流に流れ出たもので、その凄まじさを物語っています。

3. 室堂に関わった人々



昭和20年頃 室堂 (写真7)

■昭和32年当時



昭和32年当時 (見取り図)



室堂のスタッフたち (写真8)

<ようやく室堂へ>

殿が池や蛇塚を経て黒ボコ岩へ、弥陀ヶ原、水屋尻を通り室堂へ到着しました。「お疲れ様です〜!」と、事務所で受付の女性が笑顔で迎えてくれました。

事務所の屋根裏が学生アルバイトの寝ぐらになっていました。写真8は昭和30年頃の事務所前でのスナップ写真です。中央で腕組みをしている方は木下幸雄さんで23年間の長い間、室堂の主任を務めておられました。



ポッカさんと玉井敬泉氏 (写真9)

写真9、10は室堂へ物資を運ぶ様子ですが、ヘリコプターによる空輸が始まったのは昭和40年代からで、それまでは、ポッカさんと呼ばれた方々の人力が頼りでした。朝2時に起床、早朝のまだ4時頃に市ノ瀬を出発していました。100kgを超える荷物を背負子に乗せて室堂まで食料や燃料、時には社務所建設の棟木を背負い、人まで担ぎ上げるという大変な労力を費やす仕事でした。写真9のポッカさん達の最後尾で背負われているのは白山の画家で初代白山観光協会事務局長玉井敬泉さんです。

また、当時は室堂員 (学生アルバイト) によるポッカ隊が野菜、味噌、酒、石油、郵便物などを1人あたり9貫~20貫 (約34~75kg) くらい背負い、5~7人位の編成で荷揚げを補完していました。荷揚げ料は、当時1貫あたり70円でした。室堂員は通称、「兵隊」とも言われ、室堂掃除、皿洗い、部屋の案内、ランプ磨き、水汲み等、白山が好きだから何でも出来たそうです。



室堂員によるポッカ隊 (写真10)

4. 思い出深い出来事

<天皇陛下の白山登山>

昭和55年8月、天皇陛下が浩宮徳仁親王殿下の頃、白山登山をされました。白山比咩神社の北村政治権宮司がご案内されました。雨や霧の天候でしたが、多種多様な高山植物にご興味をもたれ感動された御様子でした。また、天皇陛下は、昭和55年11月1日明治神宮御鎮座60年祭の御献詠歌の中で、「白山」をお詠みになっておられます。



昭和55年8月 黒ボコ岩にて（写真11）

徳仁親王殿下御歌
ももとせの昔
帝の見ましけむ
白山にして我登
里逝去

昭和55年11月 明治神宮御鎮座60年祭にて
（宮内庁より、許可を得て掲載）

天皇陛下は、「百年前に 明治天皇が 御覧になったであろう『白山』に私は今登っているのだ」という意味のことを詠まれました。

<日本野鳥の会初代会長 中西悟堂氏>

金沢市出身の日本野鳥の会初代会長、中西悟堂さん（写真12左）が昭和30年8月に田谷充実石川県知事の依頼を受け、同年5月に国定公園に指定された白山を国立公園に昇格させるべく、調査を目的に登山されました。その後、「加賀白山の鳥相」や「白山鳥類分布表」を発表されました。中西悟堂さんをはじめ、多くの方々のご尽力により、白山は昭和37年に国定公園から国立公園に昇格しました。



室堂にて 中西 悟堂氏 左側（写真12）

5. 室堂で仲間とともに 白山小唄（作詞 国立大学医学部室堂診療所員による）

春の白山 男ならおじゃれ 度胸試しの 熊狩りに 夏の白山 御前峰は招く 室にゃ乙女の 花が咲く
秋の白山 いで湯につかりゃ 峰は紅葉の 綾錦 冬の白山 雷鳥ならで 飛ぶは雄々しき スキーヤー
雪のカンクラ 転法輪の岩屋 池は千蛇の 底知れず 夜の室堂で 下界を見れば 福井 名古屋は 目の下よ
朝の頂上で お神酒を飲めば 帰りゃ ふらふら 千鳥足

6. あとがき

白山に60年余り、200回以上登った中で、思い出深い比較的古い時代のものを中心に書いてみました。また、機会があれば、新しい時代のものも書ければと思います。

資料提供

福田（写真1） 白山室堂会（写真2,10） 北陸鉄道（写真3）
木下写真館（写真4～9,11,12）

ブナオ山観察舎の中で見つかるムシたち ～建物の中のムシ～

中田 勝之（白山自然保護センター）

皆さんは建物の中のムシと聞いて、何が思い浮かびますか。ハエやカ、今シーズンは例年よりも発生が多いといわれるカメムシ類でしょうか。

今回、野生動物を観察するブナオ山観察舎という建物の中で、これらのようなあまり好かれていないムシたち以外に、石川県で初めて見つかったムシや生態が全く謎なムシなど多様なムシたちが見つかることについて、知ってもらえると嬉しいです。

1. ブナオ山観察舎とはこんな施設

ブナオ山観察舎（以下、観察舎。）は、1981年に白山麓で開館し、冬季間に対岸のブナオ山に生息する哺乳類や鳥類などを室内から観察できる全国でも数少ない野生動物観察施設です（写真1、2）。

この観察舎は木々が落葉し、葉っぱなどに隠れていた動物たちが姿を見せ始める11月下旬に開館し、春になり新緑の中に動物たちが姿を隠す翌年5月上旬に閉館となります。

なお、観察舎周辺は全国でも有数の豪雪地帯であり、2022－2023年冬の最大積雪深は210cm、2021－2022年冬は320cm、今季はどうでしょうか。

また、本誌50巻第1号で観察舎の説明やここから見られる冬眠明けのクマの様子などが豊富な写真入りで大変分かりやすく述べられていますので、機会があれば、是非ご一読をお勧めします。



写真1 2022年12月下旬の観察舎外観



写真2 観察舎館内の様子

2. 観察舎の中で見つかるムシたち

このたび筆者は、2022年11月～2023年4月にかけて、観察舎での勤務の傍ら、室内で見つかるムシたちを殺虫管（写真3）という採集道具で捕まえ、標本にして名前を調べるという調査を続けました。

その結果、バッタやカメムシ類が7種、コウチュウ類が8種、ハエ類が31種、ハチ類が23種の合計69種を確認しています。

なお、ムシの名前を調べることを同定といいます。今回の同定に当たって、筆者が分からないムシは、それぞれの専門家である6名の方に標本を送り、調べてもらいました。専門家の皆さまありがとうございます。

それでは今回観察舎内で確認されたムシたちの中から、注目すべき種や興味深い種について、以下のとおり説明したいと思います。



写真3 殺虫管（長さ約100mmで底部に薬品が入っている。）

3. 注目すべきムシたち①～ニホンミツバチ（写真4）～

まずはじめは、皆さんに馴染み深いムシの一つ、ミツバチです。

日本には在来種のニホンミツバチ（以下、ニホン。）と外来種で養蜂に用いられるセイヨウミツバチ（写真5、以下、セイヨウ。）の2種がいます。

一般的に山間部にはニホン、平野部ではセイヨウが生息し、ニホンは生息環境が減少、セイヨウは拡大する傾向で、今回、観察舎ではニホンのみが見つかりました。



写真4 ニホンミツバチ
（約10mm）

写真5 セイヨウミツバチ
（約13mm、金沢市内で採集）

そのため、今のところセイヨウがここには分布を広げていないことを確認できたものです。なお、両種の主な違いは以下のとおりです。

- ・2種を見分けるポイントは、セイヨウに比べてニホンの方が少し小さく、全体的に黒っぽいことなどです。（写真4、5）。
- ・また、ニホンは天敵のスズメバチ類に巣を襲われた場合、数十匹でスズメバチを団子状に取り囲み、胸部筋肉を振るわせて団子内の温度を48℃近くまで上げて、内部のスズメバチを蒸し殺します。これは高温に弱いスズメバチ類の性質を高温に強いニホンが利用したものです。おそらく古来より、襲われ続けたニホンが生き残るために獲得した習性なのでしょう。そのため外来種のセイヨウはこの習性を持っておらず、セイヨウの巣がスズメバチ類に襲われると、全滅することもあるようです。

4. 注目すべきムシたち②～ミカドアリバチ（写真6）～

アリなのかハチなのか、分かりにくいムシですが、その正体は翅のないハチです。

そして、このミカドアリバチ（写真6、以下、ミカド。）はクロマルハナバチ（写真7、以下、クロマル。）の巣に寄生する習性を持ち…。少々複雑ですね。

その寄生方法ですが、翅を持たないミカドのメスは、地面の上をひたすら歩き回り、土の中のクロマルの巣を見つけて、侵入します。

その後、ミカドのメスは巣の中のクロマルの蛹に近づき、写真6矢印の毒針（麻醉針）を打ちこみ、動けないようにします。そして動けなくなった蛹の体内に自らの卵を産み込むのです。クロマルの体の中で孵化したミカドの幼虫は、内側からその筋肉等を食べて育つことになります。



写真6 ミカドアリバチ（約12mm）と尾の毒針（赤丸）



写真7 クロマルハナバチ
（約20mm）

人間に当てはめて想像すると、かなり衝撃的ですが、ムシの世界では当たり前となっている寄生の方法なのです。

なお、今回ミカドのメスが観察舎2階の床の上で見つかりました。風で飛ばされたのか、階段を登ってきたのか、分かりませんが、とても不思議ですね。

最後に、よく見ると美しいミカドですが、やはり翅のないハチであり、捕まえようとして触れると、写真6の毒針に刺される可能性があり、刺されると非常に痛いそうです。観察舎内はもちろん他の場所でも、このムシを見つけたら、気を付けてください。

5. 注目すべきムシたち③～ルリヒラタムシ (写真8)～

名前のお通り、瑠璃（るり）色の平べったいムシで、写真8の背面側から見ると、普通のムシですが、写真9の側面を見ると、驚くべき平べったさが分かるでしょうか。

特徴的な体形のルリヒラタムシは、成虫・幼虫ともに林内の倒木樹皮下で他のムシを捕まえて食べる肉食のムシです。樹皮下という狭い隙間に適応して、この形になったのでしょうか。因みに成虫はその樹皮下などで越冬します。

また、北海道から九州にかけて分布しますが、全国的に個体数は少ないようです。

しかし、筆者が以前、白山市内のブナ林で、地表付近を飛ぶムシたちを衝突・落下させて下部の容器に集める衝突板トラップ（写真10）を設置した際、複数のルリヒラタムシが見つかり、大喜びしたことを思い出します。

そのほか、この原稿を書いている2023年11月下旬の暖かい午前中に、観察舎1階の床の上を歩くルリヒラタムシが一度に3個体が見つかりました。

林の中でひっそりと暮らしていると思っていたこのムシですが、実は盛んに飛び回り、また歩き回りながら生活しているのかもしれない。



写真8 ルリヒラタムシ
(約25mm) 背面



写真9 ルリヒラタムシ側面



写真10 衝突板トラップ
(幅450mm、高さ300mm)

注目すべきムシたち④～ナラアオジョウカイモドキ (写真11)～

とても長い名前のムシであり、少し解説していきたくと思います。

そもそもコウチュウの中には、ジョウカイボンという肉食性の体の柔らかい分類群があります。しかし、ナラアオジョウカイモドキ（以下、ナラアオ。）は、ジョウカイボンに近縁でありながら、別のグループであるため、ジョウカイモドキという少々かわいそうな？名前になり、更に最初に奈良県で見つかり、キレイな青色であることから、この名前となったようです。

さて、ナラアオは、頭部の三角形の突起や黄色の前肢がなかなかカッコイイムシで、これまで僅かな採集例として主に西日本で春から初夏にかけて花に集まることが知られていました。



写真12 窓のそばを歩く
ナラアオジョウカイモドキ

今回、豪雪地帯である観察舎で、しかも残雪の残る3～4月にかけて、2階の窓ガラスのそばで8個体が見つかったのです（写真12）。

大変驚きつつ、ジョウカイモドキ類を研究している奈良県橿原市昆虫館の研究者に標本を送り、ナラアオであると確認してもらいました。その後、その研究者と共著で日本甲虫学会誌に石川県初記録種として報告したところです。

しかし、このムシがどうしてこの時期に突然見つかったのか、



写真11 ナラアオジョウカイ
モドキ (約4mm)

また何を食べているのかなど筆者はもちろん、研究者にも分からないことばかりであり、今後とも観察舎内外での調査が必要です。

6. 注目すべきムシたち⑤～縁起の良いお天道様のムシ～

テントウムシは空のお天道様（太陽）に向かって飛ぶムシとして、昔から縁起が良いと親しまれてきました。

観察舎内では大きいカメノコテントウと小さいナミテントウ（写真13の上と下）がよく見つかります。

写真13上のカメノコテントウは模様がカメの甲羅に模様が似ていることから付けられた名前です。隣の一円玉と比べると、その大きさが分かると思います。

また、写真13下のナミテントウは多様な斑紋を持つことが知られており、並べてみると、同じ種類とは思えません。

なお、暮らしの中でのムシのデザインを調べた研究において、圧倒的に多いのがテントウムシのこと。自転車のベル、ハサミ、スリッパ、時計、多様なぬいぐるみなどなど、縁起の良いムシとして人気のあるテントウムシは様々な商品デザインとしても好かれているようです。



写真13 上がカメノコテントウ（約12mm）、下がナミテントウ（約5mm）

7. 注目すべきムシたち⑥～30種を超えるハエ類～

昨年、観察舎での勤務開始後、最初に目に入り、そして採集を始めたきっかけがハエ類でした。窓ガラス表面を歩くその姿をよく見ると、形や色が全然違うことから、何気なく軽い気持ちで採集を始めると、すぐにたくさんの標本が集まるものの、自分では名前が分かりません。そのため、^{そうしもく}双翅目談話会というハエ類を研究する学会の研究者を紹介してもらい、その方に標本を送ったところ、観察舎内から31種ものハエ類の名前を調べていただきました。しかもその半分以上が石川県初記録とのこと。そうなるや、俄然興味が沸いてきて、自分でもこのハエ類を研究する談話会に入会し、その研究者と共著で、この31種のハエ類を報告したところです。

しかし、なぜ観察舎内で多くのハエ類が見つかるのか、今のところ全く分かっていません。また、2023年11月の開館以降、この31種以外で名前の分からないハエ類がどんどん見つかります。今後の調査で判明することが増えると思いますが、分からないことも増加しそうで、また、増え続ける標本の保管場所に頭を抱える今日この頃です。

さて、ハエ類のなかには、特徴的な形や色彩を持つ種類も多く、掲載したい写真がいくつかありましたが、苦手な方も多いため今回は載せませんでした。興味のある方はブナオ山観察舎内に標本などを展示しておりますので、それをご覧いただくほか、筆者にお声かけいただければ、そっと色々なモノをお見せできると思います。

8. 最後に

本誌第50巻での連載のとおり、筆者は長年白山等でアリの巣に居候するアリヅカムシというコウチュウを中心に研究を続けてきました。しかしハエ類に興味を持ち、その仲間のガガンボ類やアブ類、ハナアブ類のほかハナバチ類なども採集し、それぞれの研究者に標本を送り名前を調べていただくことで、驚くべき多様なムシの世界を感じながら、観察舎での勤務を楽しむ毎日です。

最後に、観察舎を訪れる皆さまには、カメムシ類をはじめ、ムシなどいない方がよいと思われるかもしれませんが、これまで述べてきたように、室内で見つかるムシたちの中には多様な興味深い生態が見つかります。

悪天候などで窓の外の動物観察が難しい時、少々窓の内側に視線を移し、ムシたちに気が付いていただけると、とても嬉しいですね。

石川県内で見られる『シカ』2023

有本 紀子（白山自然保護センター）

現在、石川県内に生息し、名前に『シカ』とつく野生動物は、ニホンジカ（以下、シカ）とニホンカモシカ（以下、カモシカ）の2種がいます。しかし、「カモシカってシカじゃないの?」「シカとカモシカはどう違うの?区別がつかない。」という声が度々聞かれます。そこで、今回、カモシカとシカを比べて、その違いを見ていくことにしましょう。そして、県内のどこかで今度『シカ』に出会ったときに、特徴を確認しながら、両者を判別できるようになれば、自然の中へ出かけることもますます楽しくなると思います。

1. 県内のカモシカとシカの動向

カモシカは、かつては白山市の山奥でもほとんど見られることがなく、「幻の動物」と言われていましたが、1955年に国の特別天然記念物に指定され、分布拡大とともに徐々に生息数が増えました。

ブナオ山観察舎（白山市尾添。以下、観察舎）では、マスコットにもなっているように、開館当初（1981年）からほぼ毎日のように観察でき（図1）、カモシカ目当てに県外や海外からも来館されています。

一方シカは、万葉集や百人一首に詠まれていますし、奈良公園では人にエサをねだることで知られ、昔から身近に感じてきた野生動物です。

県内でも、遺跡からその骨が出土されるなど、大昔から生息していましたが、狩猟や駆除などにより大正時代までに絶滅したようです。しかし全国的な分布拡大等により、2012年以降、再び目撃や捕獲が増え、2013年から観察舎でも見られるようになってきました。



図1 ブナオ山観察舎のマスコット

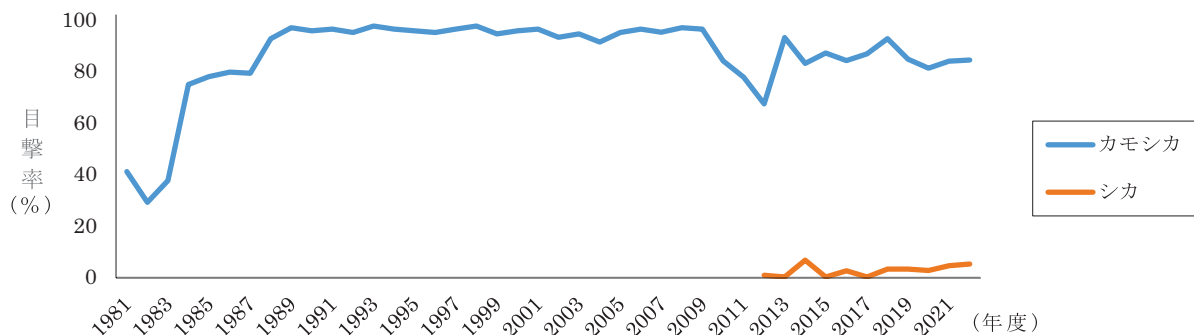


図2 ブナオ山観察舎からの年度ごとの目撃率（目撃日数*／開館日数×100）

*目撃日数は、開館時間内に1頭でも目撃された日の数

2. カモシカとシカを比べてみましょう

両種とも草食の大型哺乳類ですが、実はニホンカモシカはウシやヤギと同じウシ科の動物で、本州、四国、九州にのみ生息する日本固有種です。ニホンジカはヘラジカやトナカイなどと同じシカ科で、名前に「ニホン」とつきますが、ベトナムから極東アジアにかけて、国内では北海道から九州まで広く分布しています。

また、カモシカは国の特別天然記念物として保護されていますが、シカは急増による自然環境への影響が危惧され、指定管理鳥獣として捕獲が強化されており、管理上の対応は大きく違ってきます。



写真1
カモシカ(ウシ科)



写真2
ウシ(ウシ科)

<見た目の違い／全身>

カモシカには雌雄ともに十数cm程の角が生えており、体の大きさもほとんど差がありません。子どもを連れていけばメスとわかりますが、見た目では雌雄の判別が付きません。

一方、シカのオスには枝分かかれた特徴的な角が生え、メスやその年に生まれた子どもには角は生えませんが、カモシカと違い、見た目では雌雄の判別ができます。

日本の伝統模様「鹿の子」に鹿の子模様がありますが、子ジカだけでなく、春や夏のシカの体はオスもメスも、大人も子どもも関係なく、みんな赤茶色に白い斑点がある鹿の子模様をしています。子ジカは春に生まれますが、生まれたときから鮮やかな鹿の子模様をしています。冬になると白斑点が消え、子どもとメスは全体が薄茶色の毛に変わり、オスは全体が焦げ茶色の毛になります。

カモシカも春と秋に毛が生え変わりますが、それほど見た目は変わりません。

	ニホンカモシカ	ニホンジカ オス	ニホンジカ メス
春夏 (夏毛)			
秋冬 (冬毛)			

写真3 ニホンカモシカとニホンジカの全身の見た目の違い

<見た目の違い／尻尾>

カモシカの尾は短くて体や尻と同じような色をしているためわかりづらく、排泄時^{はいせつ}に尾が上がったときにだけ、その存在をはっきり認識できます。

シカの尻尾の毛は白色で目立ちます。危険を感じて緊張すると、尻の白い毛が逆立って広がります。

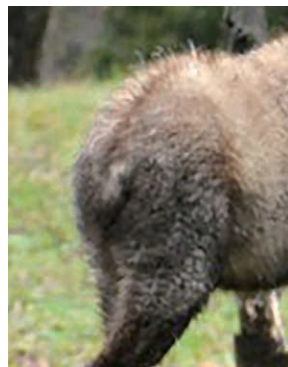


写真4 カモシカの尻尾

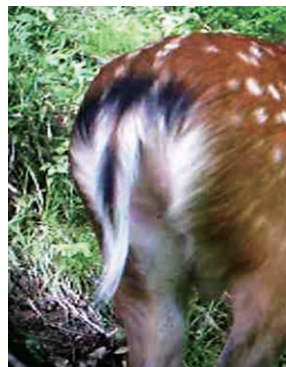


写真5 シカの尻尾

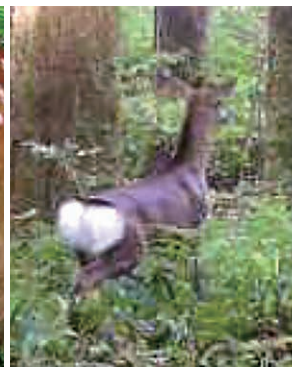


写真6
尻の毛が広がったシカ

<行動や生活の違い>

カモシカは単独でなわばりを持って生活します。母子や、メスにオスが近づいているときなどは2～3頭いるときもあります。動きが緩やかで、人と出会ってもすぐには逃げず、じっとこちらを見ていることが多いです。

シカは通常なわばりを持たず、オスは単独かオス同士で、メスは単独か母子で群れて行動します。繁殖期になると優勢なオスが複数のメスを囲い、ハーレムを持ちます。5頭以上で群れていたり、人と出会ったときにぴょんぴょん跳ねるように逃げて行ったら、それはシカに間違いないでしょう。シカは深雪が苦手なため、冬に、より積雪の少ない杉林に集まっている姿がときどき目撃されます。



<似ているところ／^{ひづめ}蹄と足あと>



写真7
蹄で顔をかくカモシカ

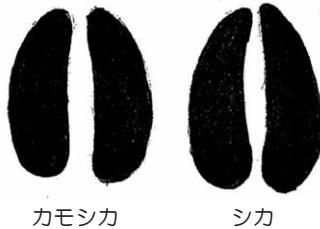


図3 足あと



写真8 シカの蹄

カモシカもシカも^{ひづめ}蹄が左右に分かれている偶蹄目です。

両種の足あとは大きさも形もとても似ているので、これだけで、カモシカかシカかを判別することは難しいです。

<似ているところ／^{ふん}糞>

カモシカもシカも、長さ1.5cm程度の小さくて黒光りした糞をぼろぼろとします。その一つ一つは両種ともとても似ていて見た目では判別はつきません。

しかし、カモシカとシカは糞のし方が違うため、糞のまとまり方である程度判別することができます。カモシカは同じ場所で立ち止まって糞をすることが多く、一か所に多数の糞がまとまる「ため糞」となります。一方、シカは歩きながら糞をすることが多く、地面にまばらに落ちていることが多いです。



写真9 カモシカの糞

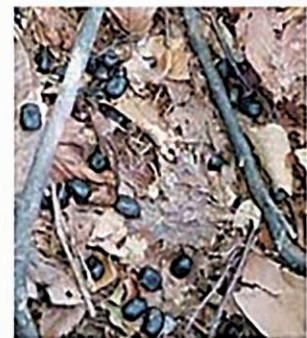


写真10 シカの糞

<毛質の違い>

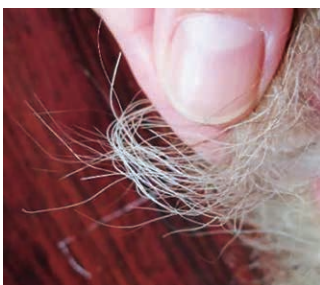


写真11 カモシカの毛

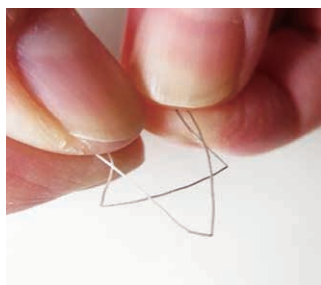


写真12 シカの毛

上記のような足あとや糞の近くに毛が落ちていたら、毛を曲げてみましょう。

カモシカの毛はふわふわと弾力性がありますが、シカの毛は、カモシカに比べ皮質が薄く、中はストローのように中空となっており、ポキポキと折れやすい特徴があります。

3. 角にクローズアップ

カモシカなどウシ科の角は、頭骨の突起に漏斗状の角の皮がかぶさるように生え、洞角と呼ばれます。角は生え変わることなく一生伸び続け、つけ根には年輪のようなしわが刻まれます。英語でhornと呼ばれ、楽器のホルンはこれら洞角で作られていた楽器の名残です。



写真13 カモシカの角

一方、シカ科の枝分かれする角は英語でantlerと呼ばれ、毎年生え変わります。日本のサッカーチーム（鹿島アントラーズ）の名前やエンブレムにもなっていますね。シカの枝角は3回分岐し先端が4本にまで伸び、年ごとに太く立派になってゆきます。2～3歳の若いシカや年老いたシカの角は控えめな大きさで、満1歳のシカは枝分かれのない1本角です。シカとなじみのある地域では、それが根菜のゴボウに似ていることから、その角を持つ個体をゴボウ角やゴンボと呼ぶことがあります。



写真14 さまざまな長さの角のゴンボ

春先、前年に生えた角が落ち、遠目には雌雄の区別が付きません。しばらくすると皮膚

に包まれた上にビロードのような細かな毛が生えた袋角が生えてきます。成長中の袋角の中は血液が流れていて、触ると温かく柔らかいです。袋角を原料とした鹿茸という漢方がありますが、その名の通り、袋角は茸のようによきよきと伸び、8月頃に袋角が伸びきると血流が止まり、硬くなっていきます。シカは木などに角をこすりつけ（角とぎ）外皮が剥げ落ち、骨化した枯角が完成します。



写真15 鹿茸



写真16 ブナオ山斜面で角突きをする雄シカ

秋になると繁殖期を迎え、雄シカは雌シカをめぐる、自分と体格や角が互角な雄シカと角を突き合わせるのです。



図3 雄シカの角の1年

参考資料・引用文献

- 石川県白山自然保護センター（1990）白山の自然誌10ニホンカモシカの1年
- 石川県白山自然保護センター（2017）白山の自然誌37ニホンジカの生態
- 鷲谷いづみ，梶光一，横山真弓，鈴木正嗣（2021）実践野生動物管理学
- 石川県（2022）第3期石川県ニホンジカ管理計画

写真協力

近藤 崇（写真3上中・右）、ばんき和漢堂薬局（写真15）、山下 和樹（写真1、3下右、14右）、山根 勝（写真3上左・下左・下中、7、13）

続 花らんまん 夏の白山

— 登山者『花』アンケートin市ノ瀬 最終報告 —

後藤 理子（白山自然保護センター）

前号で「白山の花アンケート」の中間報告をお伝えしましたが、9月いっぱいアンケートを終了し、今回は最終結果を報告します。投票数や内訳は次ページの表をご覧ください。みなさんの好きな花、気になる花は入っていますか？

<アンケート>

方法：市ノ瀬ビジターセンターカウンターに、花の名前と写真を記したボードを設置し、職員が声をかけながら、一人一票「印象深かった花・好きな花」の欄にシールを貼ってもらう。

対象：市ノ瀬ビジターセンター来館者のうち、白山登山の帰りに立ち寄った方や、以前白山に登ったことのある方。年齢や性別、登山歴は不問。

期間：2023年6月21日～9月30日

結果：回答数785票（61種）

<白山の花を もっともっと楽しみましょう>

ふと立ち止まった足元の一輪に癒されたり、斜面を埋め尽くす群生に目を奪われたり、厳しい環境の中で小さな体を震わせている姿に心打たれたり…。花々は、私たちに素晴らしい感動を与えてくれます。私自身も白山の花々に魅了された一人で、毎年楽しみながら歩いています。クロユリなど代表的な花も大好きですが、あまり目立たない花も観察するとなかなかおもしろく、ハマります。例えば「白い細かな花が集合して咲くセリ科の仲間は区別がつかない」とよく言われますが、オオハナウドの花は外側の花弁だけ兎の耳のように長くなっていて、これは他のセリ科にない特徴です（写真1）。葉の形も



写真1 外側だけ長い花弁のオオハナウド



写真3 ポンポンみたいな花
ミツバベンケイソウ

種によって異なるので、葉も観察してみましょう。ハナイカリ（写真2）やミツバベンケイソウ（写真3）は、色こそ地味ですが形がユニークで、つい時間を忘れてのぞきこんでしまいます。

市ノ瀬ビジターセンターでは、白山の自然情報を収集、発信しています。登山にお越しの際は帰りにぜひお寄りい



写真2 ハナイカリ

ただき、動植物の様子などをお知らせください。また、開花状況や動物の目撃情報、花や生き物についての質問など、スタッフにお気軽にお問合せください。お待ちしております。今年の夏も、花らんまんの白山でお会いしましょう！

登山者「花」アンケート 集計表 2023in市ノ瀬

	花の名前	6月	7月	8月	9月	合計
1位	クロユリ	7	109	15	1	132
2位	ハクサンフウロ	4	32	24	1	61
3位	ニッコウキスゲ	3	46	7		56
4位	イワギキョウ		27	13	6	46
〃	ハクサンコザクラ	8	29	7	2	46
5位	シモツケソウ		15	30		45
6位	タカネマツムシソウ		8	17	4	29
7位	チングルマ	2	12	13	1	28
8位	ハクサントリカブト			14	12	26
9位	クルマユリ		15	7	1	23
10位	カライトソウ			14	5	19
	センジュガンピ		15	2		17
	ゴゼンタチバナ	2	10	3	1	16
	コバイケイソウ	4	9	2		15
	イワツメクサ		5	6	3	14
	ミヤマダイモンジソウ		9	3	2	14
	イブキトラノオ		4	7	2	13
	イワカガミ		10	2		12
	ミヤマキンポウゲ	2	7	2	1	12
	アオノツガザクラ	2	4	4	1	11
	ハクサンポウフウ		3	4	3	10
	コケモモ		8	1		9
	ハクサンイチゲ	1	8			9
	ハクサンシャジン			8	1	9
	キヌガサソウ	1	7			8
	ソバナ			7		7
	タカネナデシコ			5	2	7
	ハクサンシャクナゲ		5	2		7
	ササユリ		5			5
	シナノキンバイ		5			5
	ツガザクラ	1	2	1	1	5
	ミヤマキンバイ		3	2		5
	ミヤマリンドウ			5		5
	ヤマハハコ		3	2		5
	サンカヨウ	2	2			4
	マイヅルソウ		4			4
	アカモノ	1	2		1	4
	ヤマホタルブクロ		3		1	4
	オオサクラソウ	1	2			3
	オンタデ			3		3
	エゾアジサイ		2			2
	ベニバナイチゴ		2			2
	テガタチドリ		2			2
	イワオウギ			2		2
	ヨツバシオガマ		1	1		2
	クロクモソウ			2		2
	クロトウヒレン			2		2
	モミジカラマツ			2		2
	シナノオトギリ			2		2
	ミヤマコゴメグサ			1	1	2
	コイチヨウラン			1	1	2
	クサボタン			1		1
	ウサギギク			1		1
	カラマツソウ			1		1
	キオン			1		1
	ツルニンジン			1		1
	ハクサンオミナエシ			1		1
	ハクサнтаイゲキ			1		1
	ミヤマダイコンソウ			1		1
	ミヤマアキノキリンソウ			1		1
	ヨツバヒヨドリ			1		1
		41	435	255	54	785

* 枠の色は花の色の系統を表す。

センターの動き（令和5年10月1日～令和6年1月10日）

10.2 カモシカ植生調査（3日、13日）	（白 山）	11.6 市ノ瀬ビジターセンター閉館	（市ノ瀬）
10.5 カモシカ全国会議（～6日）	（栃木県）	11.12 中宮展示館閉館	（金沢市）
10.7 中宮紅葉days（～15日）	（中 宮）	11.20 ブナオ山観察舎開館	（尾 添）
10.11 モニタリング1000高山帯調査（ハイマツ）（～13日）	（白 山）	11.20 ニホンジカライトセンサス調査（～29日）	（金沢市）
10.16 白山室堂・南竜山荘閉館	（白 山）	11.22 トミヨ保全対策連絡会	（白山市）
10.18 ニホンジカ糞塊調査（～11.9）	（金沢市）	11.29 ジオパーク公認観光ガイド養成講座	（白山市）
10.19 サドクマユリ調査	（珠洲市）	12.16 第3回白山自然ガイドボランティア研修講座	（白山市）
10.21 手取峡谷で石ころ探し	（白山市）	1.4 ブナオ山観察舎 雪遊びdays（～8日）	（尾 添）
10.23 白山手取川ユネスコ世界ジオパーク研修会	（金沢市）		



<講座 この冬からのバードウォッチング>



<講座 鳥越うれっしゃ会の皆さんによる民話>

今年の夏は例年がない暑さに見舞われ、大変な夏でした。12月に入っても気温の高い日何日もあり、越冬に備えようとする白山麓の動物たちにとっても落ち着かない1年であったように思います。さて、昨年12月には、第3回白山自然ガイドボランティア研修講座を開催し、市ノ瀬ビジターセンターや中宮展示館の昨年のふり返りと「鳥」「星」「白山麓に残る伝説・民話・昔話」の3つの講義を行いました。特に、「白山麓に残る伝説・民話・昔話」では、「鳥越うれっしゃ会」の皆さんによる方言を交えた、巧みなで軽快な語り口に、会場が笑いに包まれ、とても和やかな雰囲気になりました。また、機会があれば、是非お願いしたいの声も寄せられていました。

たより

今年度は5月にパリで開かれた国連教育科学文化機関（ユネスコ）の執行委員会で、白山市全域をエリアとする白山手取川ジオパークが国内10例目となるユネスコ世界ジオパークの認定を受けました。また、一昨年8月に大雨によるホワイトロード無料区間の道路が通行止めにより、臨時休館が余儀なくされた中宮展示館もようやく年間を通じて開館することができました。中宮展示館の展示物等は一部ですが、リニューアルしました。いろいろな意味で身の引き締まる思いで、新年を迎えられます。年が明けてからブナオ山観察舎で開催していました雪遊びdaysは終了しましたが、シーズン中の週末はかんじきハイクができます。もちろん、5月の大型連休まで対岸のブナオ山に生きる野生のカモシカやサルなどを観察できますので、ぜひ、お越しください（川島）

はくさん 第51巻 第3号（通巻200号）

発行日 2024年1月30日（年3回発行）
印刷所 株式会社大和印刷社

編集・発行

石川県白山自然保護センター
〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ4
TEL. 076-255-5321 FAX. 076-255-5323
URL <https://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/>
E-mail. hakusan@pref.ishikawa.lg.jp

本誌は、再生紙へのリサイクル可能な用紙を使用しています



広告

「はくさん」に広告を掲載してPRしませんか？

広報紙広告ならではの

メリット

地域に根ざした

情報発信

地域での

知名度向上

自治体発行の

信頼度の高い

広報媒体

他エリア自治体広告もお任せください！

092-716-1401

お問い合わせ

株式会社

ジチタイアド

福岡県福岡市中央区薬院1-14-5 MG薬院ビル7F

※株式会社ホープの広告事業は、2021/12/1付で株式会社ジチタイアドに会社化しております。

財源確保 検索